

『萬葉集』の〈こころ〉と〈つま〉たち

(一)

詩歌とは言うまでもなく、人間の心の心への心の訴えが、言葉に形象化されたものである。作者の心が、言葉の表現によって、読者の心に訴え掛けるのには、何も「心」なる語を用いる必要はない、というよりむしろこの語は使わないで〈心〉は表現される場合が遥かに多いし、その方が詩歌として効果は高くなるだろうが、「心」なる語もまた、言葉の一つであるから、作中に用いられても何ら差し支えなく、当然ながら色々と駆使されるものである。現に、『萬葉集』でも、「こころ」なる語が直かに作中に様々に用いられている。

全てが漢字表記によるこの詩歌集で、〈こころ〉は如何なる文字で表されているか、その文字の違いに何らかの意味があるか、そして「こころ」なる語は如何様に用いられているか、を検討してみたい。

まず、「こころ」と現在訓まれている文字を、その現われる順に、詩歌のみならず前書きや左注、書翰の文章も全て含めて、必要最少限の前後の表現と共に拾い上げて列挙することにする。次の表の、巻数を表わす欄の「●」印は、「心」なる文字が熟語の中に現われていて「こころ」とは訓まれていないものを示す。歌番号の上の「前」「後」は、その歌の前(詞章、題詞)の、及び後(左注)の文章を指し、詩歌作品ではない。「別」は「一本の

森田 孟

歌に曰く」としての別歌のことで、「二云」のあるものと共に本稿では独立した一首として扱っておく。「ころ」の表記文字欄の「*」印は、異訓の存在、あるいは校合上の問題になっていることなどを示すもので、それについては改めて後に触れる。

本稿は、西本願寺本萬葉集を底本として、竹柏會複製西本願寺本萬葉集を使用し、引用・言及の表現の字体は印刷上及び現代の一般読者の便宜上、現行の文字を原則として使用している。拾い出している表現のうち「ころ」は、表音方式のものは全て「ころ」と表記し、他は原文中の文字をそのまま使った。「ころ」の前後の表現の文字については、底本の文字を、表音方式の場合には尊重して使い、全くの仮名としての表音方式の場合には、現行の読み下しの表記に普通に使われる漢字仮名混じりの表記にしてある。それについては本稿では原則として、新編日本古典文学全集『萬葉集』(一)〜(四) (小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳) 小学館 (一九九四〜一九九六年) 以下本稿では (小) と略記に依拠する。以下の文中、例えば、①五、は巻一の五番歌という意味である。

巻	歌番号	原字	表	現
一	五	心	むらきもの心を痛み	
	後	情	焼く塩の念ひぞ焼くる吾が下情	
	八	情	感愛の情を起こしたまふ	
	一七	情	情無く雲の隠さふべしや	
	一八	情	雲だにも情有らなも隠さふべしや	
	三六	心	清き河内と 御心を 吉野の國の	
	七一	情	寐の寝らえぬに情無く	
	八二	情	うらささぶる情さまねし	
			●	
二	九八	心	後の心を知りかてぬかも	
	九九	心	後の心を知る人ぞ引く	
	一〇〇	情	妹は情に乗りにけるかも	
	後	意	意に書を寄せむと欲へども	
	一二六	心	また心契の果らぬことを恨む	
	一三五	心	肝向かふ心を痛み 念ひつつ	
	一四四	情	結び松情も解けず古 念ほゆ	
	一四五	意	歌の意を准擬ふ	

三											二										
後											前										
四七二	四七一	四六七	四六六	四五八	四五七	四五三	四五〇	四三七	三九七	三八一	三七二	三四六	二六六	二五三	二三〇	二二六	二〇七	一九六	一〇〇	一七六	
情	情	情	情	心	心	情	情	心	情	情	心	情	情	心	心	意	情	情	心	心	
痛き情は忍びかねつも	山隠しつれ情神もなし	情哀くい行く	そを見れど情も行かず	心の中に感緒ひて作る歌	君しまさねば心神もなし	情咽せつつ涙し流る	一人過ぐれば情悲しも	妹が悔ゆべき心は持たじ	結びし情忘れかねつも	家思ふと情進むな	雲居なす心いさよひ	酒飲みて情を遣るに	汝が鳴けば情もしのに古念ほゆ	思へれば心恋しき加古の鳥見ゆ	語れば心ぞ痛き	柿本朝臣麻呂が意に擬へて報ふる	慰もる情も有りやと	慰もる情も在らず	この吾が心鎮めかねつも	真木柱太き心は有りしかど	
後											後										
六一九	六〇九	六〇一	五八二	五六九	五五三	五四七	五四六	五三八	五三六	五三五	五三〇	五一四	五〇九	五〇五	五〇二	四九六	四九〇	四八一	四八〇	四七八	
情	情	情	情	情	情	心	情	心	心	意	情	情	情	情	心	心	情	心	心	心	
まそ鏡磨きし情を縦してし	情ゆも我は念はずき	情ゆも吾は念はずき	たわやめの恋ふる情に比ひ有らめやも	衣染むといふ紫の情に染みて	遠けども情し行けば	吾妹子に心も身さへ縁りにしものを	情のみ咽せつつ有るに	心在ることな思ひ吾が背子	更に愛しふる心を起す	ここに王の意悼び悲しびて	緘結びし妹が情は疑ひもなし	入りにけらしも我が情さへ	慰もる情も有りやと	打ち靡き情は君に縁りにしものを	東の間も妹が心を忘れて念へや	浦の浜木綿百重なす心は念へど	淀の継ぎ橋情ゆも思へや妹が	思へりし心は遂げず	万代に憑みし心いづくか寄せむ	御心を見し明らか	

四

六一九	六三八	六四五	六四七	六五三	六五七	六七一	六七三	六八二	六八七	六九一	六九二	六九四	七〇五	七一一	七一三	七一四	七一六	七一八	七二〇	七二五	
意	心	心	心	情	意	情	心	情	情	情	情	心	情	情	情	情	心	情	情	情	
かにかくに意は持たず大船の 月か経ぬると心遮ひぬ	日を近み心に咽ひ音のみし泣かゆ 心には忘るる日なく念へども	情には忘れぬものを	はねず色の変ろひやすき吾が意かも 惑へる情念ひあへなくに	ませ鏡磨ぎし心を縦してば ねもころに情尽して恋ふる吾れかも	愛しと吾が念ふ情：崩えなむ	情に乗りて念ほゆる妹	人の情を尽さく念へば	恋草を：積みて恋ふらく吾が心から	情のうちに恋ひわたるかも	浮きたる心吾が念はなくに	情たゆたひ逢はぬこのころ	情には思ひわたれどよしをなみ	吾が恋ふる情はけだし夢に見えきや	夢に見て心のうちに燎えつつぞをる	むらきもの情摧けて	にほ鳥の潜く池水情有らば	君に吾が恋ふる情示さね				

七三五	七七〇	七八九	七九三	七九四	七九六	八〇〇	八〇二	八〇六	八一二	八一三	八一五	八五三	八六四	八八六	八八九	沈痾自哀文				
情	情	情	心	許す呂	許す呂	心	心	意	心	許す呂	情	心	心	心	心	心				
霞たなびき情ぐく：独りかも寝む 逢はなくのみぞ情さへ妹を忘れて	情ぐく念ほゆるかも春霞たなびく	永に崩心の悲しびを懐き	こころゆも思はぬ間	語らひしこころ背きて	妹がこころのすべもすべなさ	惑へる情を反さしむる歌	子を愛したまふ心有り	また抱梁の意を傷ましむ	恋望の殊念は常の心に百倍す	みこころを鎮めたまふと	何をもちてか情を擲べむ	ただ性水に便ひ、また心に山を樂し	心神の開朗にあること	古旧を懐ひて志を傷ましめ	徳を仰ぐ心	心葵藿に同じ	自らに心を傷むる恨みあらむ	慰むるこころはあらまし	曾て作悪の心無し	心も亦塵に累ふをもちて

二四六九	心	うらぶれて心も深く吾が恋ひやます
二四七一	心	妹が心を吾が念はなくに
二四八二	心	玉藻のうち靡き心は依りて恋ふる
二四八八	*心	磯の上に立てるむろの木 心哀 <small>こころあはれ</small>
二四九六	心	染木綿の染みにし心我忘れめや
二五一一	*心	常滑のかしこき道ぞ汝が心ゆめ
二五二二	心	外のみぞ見し心は念へど
二五二三	心	少なくも心のうちに吾が念はなくに
二五二五	情	吾が情利の生けるともなき
二五二八	心	思ひ悔ゆべき心は持たじ
二五三五	*行	凡ろかの行は念はじ <small>おほ</small>
二五三七	心	吾が持てる心はよしゑ君がまにまに
二五四一	心	妹を置きて心空なり土は踏めども
二五五二	情	情には千遍にしくしく念へども
二五六六	情	情のうちの隠り妻はも
二五七一	心	なくさもる心もあらむ我ぞ苦しき
二五七三	情	情さへ奉れる君に
二五七九	情	相見むと念ひし情今ぞなきぬる
二五八一	心	少なくも心のうちに我が念はなくに
二五九六	心	なくさもる心はなしに
二六〇二	心	結びてし心ひとつを今解かめやも
二六〇三	心	心をし君に奉ると念へれば
二六五七	心	いはへども人の心は守りあへぬもの
二六九九	意	瀬を速み意は念へど直に逢はぬかも
二七〇一	心	石橋の遠き心は思ほえぬかも
二七二一	情	恋のよどめる吾が情かも
二七二四	心	木積成す心は依りぬ
二七四八	心	しみにも妹は心に乗りにけるかも
二七四九	情	直乘りに妹は情に乗りにけるかも
二七五八	心	ますらを心念ほえぬかも
二七七九	心	打ち靡き心もしのに念ほゆるかも
二七八〇	情	靡き藻の情は妹に因りにしものを
二七八五	心	我が恋ふる心のうちは止む時もなし
二七九二	意	玉の緒のうつし意や年月の
二八一六	心	天雲のたゆたふ心吾が念はなくに
二八三五	心	小野の浅芽を心ゆも人引かめやも
二八四二	心	我が心としみ念ふ
二八四五	意	物語りして意遣り過ぐせど過ぎず
二八五六	心	心鈍く手向けしたれや
二八七四	情	情をぞ使に遣りし夢に見えきや
二八七五	心	ますらをと思ひし吾れや雄心も無き
二八八七	意	たどきも知らず吾が意天つ空なり
二八九四	心	我が胸は破れて摧けて録心も無し
二九〇二	情	百重成す情し念へばいたもすべなし

二九〇四	心	なぐさもる心し無くは生きて	君を念へかも吾が心神 <small>こころ</small> のこのころはなき
二九〇七	神	ますらをの聡き神も今は無し	意ぐみ吾が念ふ児らが
二九〇八	心	しましくも心安めむ事計りせよ	鴨頭草の移ろふ情吾が思はるに
二九一〇	心	心には千重に百重に思へれど	月草の移ろふ情吾れ持ためやも
二九一一	心	少なくも心のうちに吾が念はなくに	さな葛絶えむの心我が思はなくに
二九二一	情	たわや女は同じ情にしましくも止む	はねず色の移ろひ安き情有れば
二九三二	情	情には療えて念へど	伏す鹿の野は異にして心は同じ
二九四四	情	逢はずして情のうちに恋ふる	心無き雨にも有るか人目守り
二九四九	心	うたて異に心鬱 <small>ふさ</small> し事計り	浜松 <small>なるとらに</small> 心哀何しか妹に
二九五〇	情	情空なり地は踏めども	みをつくし心尽して念へかも
二九五五	情	夢かと情班 <small>まじ</small> ひぬ	ゆくらかに妹は心に乗りけるかも
二九六〇	情	うつせみの現し情も吾れは無し	玉の緒の徙 <small>うつ</small> し心や八十棍 <small>か</small> かけ
二九六一	心	継ぎてし聞けば心遮 <small>とど</small> ひぬ	人は衝けども意無き山の
二九七七	心	紐の緒の心に入りて恋しきものを	吾が念ふ心知らずや
二九八三	心	高麗剣己が景迹から外のみに見つ	恋ふれかも心の痛き
別二九八五	心	知らねども心は君に囚りにしものを	尽す心は惜しけくもなし
二九八六	心	すでに心は囚りにしものを	處女らが心をしらに
三〇一九	心	川淀の淀まむ心思ひかねつも	かり薦の心もしのに
三〇二五	情	君に恋ふらく吾が情から	吾が恋ふる心のうちを人に言ふ
三〇二八	心	結びてし妹が心は疑ひも無し	打ち靡 <small>な</small> き情は囚りて
三〇三一	心	天雲のたゆたひやすき心有らば	打ち靡 <small>な</small> き情は妹に囚りにけるかも
三〇四七	心	松が根の君が心は忘れかねつも	我が情焼くも吾れなりはしきやし

●	四四六六	己許呂	名に負ふ伴の男、 <small>こころつとめよ</small>
	後四四七三	心	いささかに所心 <small>おもひ</small> を陳ぶ
	四四七八	許己呂	薄ら氷の薄き <small>うす</small> こころを我が思はなくに
	四四七九	其己呂	焼き大刀の刀 <small>やいば</small> こころも我れは思ひかねつも
	四四八二	許己呂	君がこころは忘らゆましじ
	●	二十	
	四四八三	許己呂	こころ痛く昔の人し思ほゆるかも
	前四四九三	意	堪のまにま意のまにま
	ク	心	おのおのも心緒 <small>おもひ</small> を陳べ
	四五〇〇	己許呂	こころもしのに君をしぞ思ふ

この表から判ることを、若干の説明と共に巻毎に順に記したい。

卷一——「心」から始まるが、「情」の方が優勢である。

卷二——文章中には「意」だけを使う。作品では「心」と「情」は殆ど同数で前者が一回多い。

卷三——作品だけを見ると、〈心・情・情〉が三回反復されて、「心」が一回出て来て、後は、「情」が四回続き、「心」が四回続く。別に、何らの規則性もないであろう。

卷四——卷十一、十二と共に最も多く「こころ」が現れる。文章に「意」と「心」が一回ずつ使われる。「情」が「心」の二倍以上、圧倒的に多く現れ、「情」が何度か続くと「心」が一、二度出てくる。

卷五——表意方式と表音方式の表記が混淆し、文章の多い巻で、ここでは「心」の方が「情」を圧倒して断然多い。表音方式の「こころ」が用いられる中で、作品では巻の終りの方の二作に「心」が用いられている。

卷六——「こころ」の現れる最少の巻で、作品には全て「情」、文章は全て「心」である。

卷七——「心」が「情」の二倍多く現れる。

卷八——「情」がやや「心」より多い。

卷九——一七四一番の「心」は底本であるが、(藍)(壬)(類)(紀)によって「行」と改訂されうるもの。一七四三番の第三句「心悲久」には、「うらがなしく」(全註、岩)の他、「こころがなしく」(私註)の訓があり、(小)は、原文「心悲久」はウラガナシクと読むべき表記だが、意味と音数の制限とを考慮して「まかなしく」

と読む、としている。一八〇五番の「こころ」だが、「乱れて」と続く時は「心」だが、「尽して」となる時は「意」なのだろうか。「心乱れて」の例は集中この一例しかなく、「みだるる許己呂」(⑩四〇〇八)は表音方式なので、これは何とも言えない。表意方式で最も多い文字は「心」であり、表音方式で最も多いのは「許己呂」であるが、だからと言って、表音方式の「許己呂」は表意方式の「心」に相当するとは、他の例をざっと検討した限りでは今のところ一概には言えない。「心尽して」(⑦一三二〇)、「情尽して」(④六八二)の例を見れば、「尽して」だから「意」を用いたのではなく、単に文字を変えたにすぎまい。「尽して」と繋がる「こころ」は、「心」「情」「意」が存在するのである。

卷十——「心」と「情」が全く同数である。二〇三三番は、第三句以下「定而神競者磨待無」には定訓なしとされていて、「さだまりてかみしきほへばとしまたなく」(全註)「まろもまたなく」(注釋)、あるいは本稿が筆者の好みで採った訓(私注)、などがある。「次点」サタマリテコ、ロクラベバトキマタナクニ」をはじめ諸説があるが、いずれも定訓と言えない(小)。「神」を「こころ」と訓む例は集中もう一例、⑫二九〇七にあり、これには別に異訓はないようだ。

卷十一——集中、この巻に「こころ」が最も多く使われており、その四分の三は「心」で、圧倒的に多い。二四五二番の第三句「意追」は、「なぐさめて」の訓も多いようだが、(そして、二四一四番では同じ「意追」を「なぐさめ」と訓ませているが)、(全註、岩、塙)と共に(小)も「こころやり」と訓むので、本稿は「意」を「こころ」と訓むことにする。二四八八番の第三句「心哀」には、「こころいたく」(全註)の訓もある。尚、「ねもころに」と訓む「心哀」は、(と)言っても、底本の原文は「心裳」であるが、(元、類)によって「心哀」と改められるのだが(もう一例、⑫三三三〇にある。因に、「ねもころ」に、の、ころに)は集中二九回使われ、今挙げた「心哀」の二回以外を示せば、次のようになる。

「勲」——②二〇七、④五八〇、④六八二、④七四〇、④七九一、⑦一三二四、⑩二五二五、⑩二七五八、⑫三〇五一、⑫三〇五三。

「根毛許呂尔」——④六一九。／「叩々」——⑧一六二九。／「根毛居侶」——⑨一七二三。

「惻隱」——⑪二三九三、⑪二四七二、⑪二四七三、⑫二八六三。／「根母己呂尔」——⑪二四八六別歌。

「惻隱々々」——⑫二八五七。／「勸懇」——⑫三〇五四。

「慇懃」——⑫三一〇九、⑬三二九一。

「根毛一伏三向凝呂尔」——⑬三二八四。「一伏三向」を「コロ」と訓ませるのは、幸田露伴の所謂「まこと
に暇多き大宮人」の愉快な遊び心の仕業の一つであり、これを最初に訓み解いた人の満足はさぞかしと同慶の至
りではあるが、それにしても、巫山戯るのもいい加減にしろ、と怒鳴りたくもなる。尤も、漢字を並べての表記
などという単調で辛気臭い作業をする身になれば、この種の巫山戯心も無理はないと首肯できようか。

「祢毛己呂尔」——⑭三四一〇。／「祢毛許呂尔」——⑰四〇一一。／「根毛己呂尔」——⑱四一一六。

「祢母許呂其呂尔」——⑳四四五四。

二五一一番の結句は、定本は「戀由眼」で、このままで「こふらくはゆめ」（全註、岩、塙、小）の訓がある
が、影印本を熟視すると「戀」は「爾（異体字は、尔、尔）心」を凝縮したような字に見えて、本来の「戀」で
はないようにも思われるせいか、この結句は「尔心由眼」（古義）と改訂されて「ながこころゆめ」とも訓まれ
ている（桜、新、角）。意味はどちらも同程度に通じようである。「ながこころゆめ」は集中もう二例、⑦一三五
六「汝情勤」と、⑬三三〇五「汝心勤」がある。本稿では「こころ」の例が一つ増える方を採った。

二五三五番の第二句「行者不念」には、「わざはおもほじ」（全註）、「わざとはおもほじ」（注釋・別案、塙、
小）の訓があり、特に（小）の注解は行き届いていて説得力に富むので、「わざとは」に賛成したいが、本稿で
はやはり、「こころ」の例を増やすことにして、「こころはおもほじ」（桜、新、角）を採った。

卷十二——前の卷十一に次いで、集中では詩歌作品には二番目に多く「こころ」が使われていて、「心」が「情」
の二倍余多く、「意」「神」の他に、最大の特徴として、二九八三番の「景迹」がある。この第二句「己之景迹故」
の「わがこころから」には「おのがわざゆゑ」（私注）の訓もある。「景迹」は立派な行いのことであり（小）

は、魂胆、心構え、の意と注解。元来、律令用語であることも丁寧（に指摘する）、同じ様に立派な行いや徳を表わす語「景行」と共にその古訓は「ココロハセ」であるので（前者は「天武紀十一年」、後者は「名義抄」参照）、「景迹」を「こころ」と訓む根拠は十分にあるのだろう。この二字の「こころ」に比べれば、⑩四〇一五の左注の文章の「精神」を「こころ」と訓むのは、現代の我々には受け入れるのが遥かに容易であろう。

三三〇番の第三句は、底本は「心裳」で、このままで「こころゆも」（新校）の訓もあるが、（元、類）によつて「裳」は「哀」と改訂する説が強力のものである。「心哀」なら、⑪二四八八の第三句とおなじで「ねもこころ」になるし、「浜松」「根も」と続くことになるが、「心哀」と改訂した上でこれを「こころいたく」（全註）、「こころかなしく」（私注）の訓もある。

卷十三——「心」が「情」より遥かに多い。

卷十四——表音式表記の巻で、十四首中に各一度ずつ使われる「こころ」は、九番目の「こころに乗る」（三五七）の時に突如、「許己呂」になるが、他は全て「己許呂」である。「こころの緒ろに乗る」（三四六六）時は「己許呂」なので、表記の変化に別に意味は見出せそうにない。ひょいと変化をつけたのか、それまでの「こころ」の一字目と二字目とが何気なく入れ替わったのか。

卷十五——「こころ」が比較的少ない巻で、「心」は文章の中にのみ現れる。「異しき情」（三五八八）と「異しき己許呂」（三七七五）が各々一度ずつ現れるが、この巻だけを見て敢えて言おうとしてみても、表音式の「己許呂」は表意式の「情」に当たるかなどとは言えない。

卷十六——文章の方に「こころ」が多い巻で、「志」が文章の方に出てくる。

卷十七——卷十四とは逆に「許己呂」の方が「己許呂」より遥かに多い。前三九一一の「志」は一まず「こころ」と訓むことにする。前三九六七の「意」を「こころ」と訓めば「言」は「こと」であろうし、「意」を「い」と訓めば「言」は「げん」であろう。後三九八四、後四〇一五の「懐」は「こころ」と訓まれても、前三九八八、前四〇〇八、前四〇三六、前四〇四六、前四一二〇、前四一七七、前四一八〇、前四一九九、に出てくる「懐」

は「おもひ」と訓まれているようである。前四二八五、後四三二〇、の「拙懐」は「せつかい」と訓めばよいのだろうが、「つたなきおもひ」と訓んでもよいだろう。文章は漢文調のもの故、訓みは必ずしも一定はしない。

卷十八——この巻の詩歌作品の中で使われる四度の「心」は全て長歌の中である。表音式の「こころ」は底本では全て「許己呂」であるが、四二三番は(元、藍、類)によって「己許呂」と改訂されることになっている。表音式の表記の場合は完全な音記号なのだから、「こころ」と訓める表記ならいずれでもよい訳である。校合、校訂自体は必須の重要な基本作業であるが、この場合は「許己呂」を態々「己許呂」に変えても、この作品そのものにとつては殆ど意味はないとも言えよう。長歌とその反(短)歌に、「こころ」が一度ずつ出てくる他の全ての一対の場合、その「こころ」の表記が異なっている、とでもいうのなら、四二三番の改訂は意味を持つ。元来の表記が、長歌—反(短)歌—対の場合に「こころ」が一度ずつ使われる際は、その表記を変化させたのだろうか、とでもいうことになって。しかし残念ながら、長歌—反(短)歌—対に「こころ」が一度ずつ現れる他の五例、③四六六—四六七(情—情)、④五四六—五四七(情—心)、⑤八九七—八九八(心—心)、⑨一七四〇—一七四一(情—心「行」)、⑬三二八九—三二九〇(情—心)は、同じ表記のものが二例ある。

因に、長歌に二度、その反(短)歌に一度「こころ」が使われる場合も六例である。⑤七九四—七九六(許呂・許呂—己許呂)、⑬三二五〇—三二五一(心・心—心)、⑮四〇九四—四〇九五(心・心—許己呂)、⑯四一〇六—四一〇七(心・許己呂—許己呂)、⑰四一八九—四一九〇(許己呂・情—情)、⑳四四六五—四四六六(許己呂・己許呂—己許呂)。三個とも同じ表記の例が一つあるし、組合せ・順序の型は、この六例には三通り—A AB、A AA、A BB—があることになる。要するに恣意的である。

序でに見ておけば、長歌一首中に「こころ」が二度使われているものは更に次の十二例ある。①五(心・情)、③四七八(心・心)、④六一九(情・意)、⑨一七九二(心・情)、⑩一八〇四(意・心)、⑬三二五五(心・心)、⑮三六二七(己許呂・許己呂)、⑰三九六九(許己呂・心)、⑱三九七八(許己呂・情)、⑲四〇一一(情・心—表音式表記の作品なのに「こころ」は表意式表記である)、⑳四一一三(情・許己呂)、㉑四一六四(情・情)。

計十八例中六例以外は、別字を用いているので、変化させようと少しは考えたのだろうか。しかし面白いことに、長歌一首中に三度「ころ」が現れるのが二例あるが、三度とも同じ文字のものと、三度とも別字で表記しているものが一例ずつである。⑰三九六二(情・情・情——大半が表音式の作品である)、⑱四一五四(心・情・許己呂)。

短歌一首中に「ころ」が二度使われるものは次の三首であるが、「心」と「情」を各々反復して使うものと、一字ずつ用いているものが一例ずつある。②一九〇(心・心)、④七二五(情・情)、⑬三二七一(情・心)。

卷十九——「情」の方が「心」より圧倒的に多い。

卷二十——作品に「心」は用いられず、「許己呂」の方が「己許呂」より多く、また初めて表音式に、各一例ずつ、「己呂」「去里」「刀」其己呂」が現れている。

*

「ころ」の全体の有様を一覧表で示してみよう。「ころ」の表記は結局十六通りになる。主なものは「心」「情」「意」と「許己呂」「己許呂」である。各巻に各々の表記が何回用いられているかが示されるが、その下の()内の数字は、文章中に現れる「ころ」の数である。「心」なる文字は使われているが、それが「ころ」とは訓まれないものは□で示す。それが文章中のものであれば()で示される。◇は改訂してこの文字になるもので、◇が加えられている数字であることが*印で示される。従って◇は合計の数には入っていない。*印は、定訓なし、あるいは異訓のあるものが入っていることを示す。

表の見方を具体的に「全計」の欄で示しておこう。「心」は全巻の詩歌に一五〇回、文章中に四七回、その四七回うちの二二回は「ころ」とは訓まれないものである。詩歌の中に使われる「心」で、三回は、「こ

卷	心	情	意	許 多 呂	已 許 呂	神	行	景 迹	許 已 呂	志	緒	懷	精 神	己 多 呂	去 多 里	其 已 呂	計	總 計	全 こ ろ 作 品
																			作 品
1	2	5 (1)															7 (1)	8	(6) 84
2	6 ([1])	5	(3)														11 (4[1])	15	(10) 150
3	8 (1)	10															18 (1)	19	(17) 249
4	11 (1)	28	2 (1)														41 (2)	43	(39) 309
5	2 (13[2])	(2)	(1)	4	1					(1)							7 (17[2])	24	(6) 114
6	(2)	3															3 (2)	5	(3) 161
7	14 ([1])	7	2														23 ([1])	24	(23) 350
8	6	8	1														15	15	(15) 246
9	*6 [1]	3	2				(1)										11 [1]	12	(9) 148
10	8	8	1			⊙1											18	18	(18) 539
11	⊙32 [1]	8	⊙3				⊙1										44 [1]	45	(44) 490
12	24 [1]	12	3			1		1									41 [1]	42	(41) 380
13	18	7	2														27	27	(24) 127
14						13			1								14	14	(14) 230
15	(4[2])	1 (1)		1	2				6								10 (5[2])	15	(9) 208
16	5 (6[2])	2 (1)	(7)							(3)							7 (17[2])	24	(7) 104
17	2 (6[4])	7 (2)	1 (2)		2				10	(1)	(3)	(2)	(1)				22 (17[4])	39	(17) 142
18	4 (7[6])	1 (1)	(3)		(1)				*12	(1)							17 (12[6])	29	(14) 107
19	2 ([1])	14 (1)	(2)						2	(1)							18 (5[1])	23	(14) 154
20	(4[3])	2 (2)	(1)		3				8					1	1	1	16 (7[3])	23	(15) 224
全 計	150 (47[22]) [3]	131 (11)	17 (20)	5	21 / (1)	2	1 / (1)	1	39	(7)	(3)	(2)	(1)	1	1	1	370 (91[22]) [3]	464	(345) 4516

ころ」と訓まれていないものがある（「心悲しく」一回と「心哀」が二回である）。全ての「ころ」が十二通りの表記で詩歌作品に三七〇回現れ、文章中には七通りの表記で九一回、その九一回には、「心」が「ころ」とは訓まれていないものが二二回含まれている。詩歌と文章との中で用いられている「ころ」に、詩歌の中で使われていながら「ころ」とは訓まれない三回の「心」とを加えた総計が四六四——これが『萬葉集』全巻に現れる「ころ」である。「ころ」と訓まれる「ころ」が一度でも使われている作品は、全作品四五一六首（と、今は旧国歌大観通りとしておく）中、三四五首で、その全作品に占める割合は、七・六%強ということになる。

*

『萬葉集』では、如何なる「ころ」が如何様に現れているかを、その姿を表わす表現のほぼ五十音順に整頓して示してみよう。「ころ」は、以下「K」で示し、その表記は、作品番号の後に示す。

茜さす君がK ⑬三八五七・情。／ 明きK ⑭四四六五・許己呂。／ 吾がK 明石の浦に（地名との掛け言葉）

⑮三六二七・己許呂。／ 御Kを明らめたまひ ⑯四〇九四・心。／ 浅きK ⑰三八〇七・心。／ Kに飽かず

⑱二二一八・情。／ Kいまだ飽かなくに ⑲二二二一・心。／ 堪へぬK ⑳二二七九・情。／ Kは

動く、㉑四三九〇・去り里。

Kある ①一八・情。②一九〇・心。③一九六・情。④二〇七・情。⑤五三八・心。⑥七二五・情。⑦一三六

六・意。⑧一四七六・心。⑨一四八〇・心。⑩三〇三一・心。⑪三〇七四・情。⑫三三二八・情。⑬四一〇七・

許己呂。⑭四一二五・許己呂。⑮四一七九・情。

K労はし ⑯三三三五・心。／ Kのうちを人に言ふ ⑰三二五八・心。／ 今のK ⑱三二九〇・心。

痛きK ⑲四七二・情。／ K痛し ⑳一五一三・情。／ K痛く ㉑四六七・情。㉒四四八三・許己呂。／ Kの

痛き ⑬三二五〇・心。⑬三三二九・意。／Kし痛し ⑬三三一四・心。⑰四〇〇六・許己呂。／Kぞ痛き ②二三〇〇・心。⑳四三〇七・許己呂。／Kを痛み ①五・心。②一三五・心。⑨一八〇四・意。⑱四一二二・許己呂。／K痛み ⑭三五四二・己許呂。

Kいたもすべなし ⑮三七八五・許己呂。／憤るK ⑱四一五四・許己呂。／Kいさよひ ③三七二・心。⑩二〇九二・心。／Kいぶせし ⑫二九四九・心。⑧一五六八・情。(一み)／Kに入る ④五一四・情。⑫二九七七・心。

木の葉落ちて浮きたるK ④七一・心。／薄ら氷の薄きK ⑳四四七八・許己呂。／Kは疑ひもなし ④五三〇・情。⑫三〇二八・心。／Kの失する ⑪二四〇〇・心。／K消失せぬ ⑨一七四〇・情。

Kさへ消え失せれば ⑨一七八二・心。／Kうつくし ⑭三四九六・己許呂。

現しK ⑦一三四三(一云)・心。⑪二三七六・心。⑪二七九二・意。⑫二九六〇・情。⑫三三二一・心。うつろふK ⑫三〇五八・情。⑫三〇五九・情。／はねず色のうつろひやすきK ④六五七・意。⑫三〇七四・情。

うらさぶるK ①八二・情。／Kをうるはしみ ⑰三九六九・心。／うるはしとわが思ふK ④六八七・情。／Kを得る ⑦一三〇三・心。

おほろかのK ⑪二五三五・行。／K鈍く ⑫二八五六・心。／同じK ⑫二九二一・情。⑯三七九七・心。⑱四一八九・許己呂。／Kは同じ ⑫三〇九九・心。⑰三九七八・許己呂。

思ふK ④六八七・心。⑦一三三四・情。⑦一三八二・心。⑧一五四四・情。⑧一六一四・心。⑨一七九二・情。⑬三二五〇・心。⑭三四九六・己許呂。⑮三六二七・許己呂。⑮三七八五・許己呂。⑰三九五〇・意。

思ひしK ⑪二五七九・情。／思ひたるK ⑯三八〇〇・情。／思へりしK ③四八一・心。／K思ひて

⑳四四六五・己許呂。／Kには思ふ ⑪二三七一・心。⑪二五五二・情。⑱四一五四・心。／Kには思ひ ④一四・情。／Kに思ひて ⑦一二四五・情。／K思ほゆ ⑪二三九二・心。⑪二七五八・心。⑪二七七九・心。

- ⑮四〇九五・許己呂。／Kは思へど ④四九六・心。⑦一四〇一・心。⑪二五二二・心。⑫二六九九・意。⑬二九一〇・心（―には）。⑭三三六七・己許呂。／Kは思はじ ⑪二五三五・行。／K(を)思ふ ⑧一六五三・心。⑪二四七一・心。⑫二八一六・心。⑬二九〇二・情。⑭三〇五八・情 ⑬三〇七一・心。⑭三四八二・己許呂。⑮三五〇七・己許呂。⑯三五八八・情。⑰三七七五・己許呂。⑱三八〇七・心。⑳四四七八・許己呂。Kには思ひ誇りて ⑰四〇一一・情。／Kを：置く ⑯三八五一・心。／Kのうちを思ひ延べ ⑰四一五四・許己呂。／Kゆも思へ ④四九〇・情。／Kゆも思はぬ ④六〇一・情。④六〇九・情。⑤七九四・許己呂。⑦一三三八・心。⑦一三五四・心。／Kを近く思ほせ ⑮三七六四・許己呂。語らひしK ⑤七九四・許己呂。／K悲しく ⑮三六三九・許己呂。／K悲しも ③四五〇・情。⑯四二九二・情。／かぎろひのK ⑨一八〇四・心。／かり薦のK ⑬三二五五・心。K清隅の池 ⑬三二八九・情(掛け言葉)。／K競はへば ⑩二〇三三・神。／肝向かふK ②一三五・心。⑩一七九二・心。／Kを：極め尽して ⑳四四六五・許己呂。／Kは聞こえ来ぬ ⑧二六一四・心。Kぐぎ ⑧二四五〇・情。／Kぐし ⑰三九七三・己許呂。⑰三九七八・情。／Kぐみ ⑫三〇五七・意。／Kぐく ④七三五・情。④七八九・情。(春霞と関係あり)／K：崩えなむ ④六八七・情。砕かむK ⑩二三〇八・情。／K砕けて ④七二〇・情。⑨一七九二・心。⑯三八一一・心。悔ゆべきK ③四三七・心。⑪二五二八・心。⑬三三六五・己許呂。／K苦し ⑨一八〇六・情。雲居なすK ③三七二・心。⑰四〇〇三・己許呂。異しきK ⑭三四八二・己許呂。⑮三五八八・情。⑯三七七五・己許呂。／Kもげやに ⑯三八七五・心。／うたて異にK ⑫二九四九・心。⑳四三〇七・許己呂。／Kを異には ⑪二三九九・心。／K：異に ⑬三三二八・情。恋ふるK ④五八二・情。④七一六・情。④七二五・情。⑩二〇一六・心。⑪二七八五・心。⑬三二五八・心。／恋ひ来しK ⑦一二二一・心。／恋しきK ⑪三三九二・心。／Kのうちに恋ふ ④七〇五・情。⑨一七六八・

心。⑫二九四四・情。／K恋ふる ⑳四四四五・許己呂。／K恋しき ③二五三・心。／Kから：恋ふらく ④六九四・心。⑫三〇二五・情。⑬三二七一・心。

木屑くさくなすK ⑪二七二四・心。／K言ことに出る ⑰四〇〇八・許己呂。

聴ききK ⑫二九〇七・神。／さしまくるK ⑲四一六四・情。／さどはせる君がK ⑱四一〇六・許己呂。／寒水さみづのK ⑯三八七五・心。／Kさまねし ①八二・情。／K寂さびしく ⑰三九六二・情。⑱四一〇六・心。／K障さやらず ⑲四一六四・情。

下K ①五・情。⑦一三〇四・心。⑩一八八九・心。／下延ふるK ⑱四一一五・許己呂。／鹿のK ⑨一八〇四・意。⑩二〇九四・心。／K鎮める ②一九〇・心。⑤八一三・許己呂。／惚おぼはせる君がK ⑰三九六九・心。／Kに染みて ④五六九・情。／しみにしK ⑥一〇四四・情。⑪二四九六・心。⑳四四四五・許己呂。／K示す ④七二五・情。

緘せま結むすひし妹がK ④五三〇・情。／K進む ③三八一・情

Kも知らず ⑬三二五〇・心。⑭三五六六・許己呂。⑯四二九四・情。／Kを知らに ⑬三二五五・心。／Kは知らゆ ⑯三八〇〇・情。／Kを知らむ ⑰三九五〇・意。／Kを知る ②九八・心。②九九・心。⑩一九一六・情。

Kのすべもすべなさ ⑤七九六・許己呂。⑱四一〇六・許己呂。／Kは忍しのびかねつ ③四七二・情。

Kにしみて思ほゆ ④五六九・情。／Kもしるく ⑧一五九六・情

Kもしのに ③二六六・情。⑧一五五二・心。⑪二七七九・心。⑬三二五五・心。⑰三九九九・許己呂。⑱三九九三・許己呂。⑰四〇〇三・許己呂。⑲四一四六・情。⑳四五〇〇・許己呂。

Kを塞ふさかへる ⑦一三八三・情。⑪二四三二・心。／K背そむきて ⑤七九四・許己呂。／K空からなり ⑪二五四一・心。⑫二九五〇・情。／K天あまつ空からなり ⑫二八八七・意。

激あつたつたK ⑦一三八三・情。⑪二四三二・心。／玉たまかづら絶たえむむのK ⑫三〇七一・心。⑬三五〇七・許己

呂。

たつ

奉るK

⑩二〇六九・情。

／ 憑みしK

③四八〇・心。

／ K違ふ

②一七六・情。⑨四二二六・情。

K足らひに ⑮四〇九四・心。⑮四一二三・許己呂〔己許呂〕

(天雲の) たゆたふK ⑪二八一六・心。／ たゆたひやすきK ⑫三〇三一・心。／ Kたゆたひ ④七一三・

情。

Kにたぐひあらめやも ④五八二・情。／ Kをぞ使いに遣りし ⑫二八七四・情

尽すK ⑬三二五一・心。／ Kつけずて ⑭四一六二・情。／ K尽す ⑧一六三三・情。⑭四二二六・情。／

K尽して ④六八二・情。⑭四一六四・情。⑦一三二〇・心。⑫三一六一・心。⑨一八〇五(二云)・意。／ K

を尽さく ④六九二・情。／ Kつくしの山 ⑬三三三三・心。(掛け言葉)／ 奉へまつりしK ②一七六・情。

つつめりしK ⑬三二八五・心。／ Kつごく ⑮四〇八九・許己呂。／ Kつとむ ⑮四四六六・己許呂。

磨ぎしK ④六一九・情。④六七三・心。⑬三三二六・心。／ 遠きK ⑪二七〇一・心。／ 利K ⑪二四〇

〇・心。⑫二八九四・心。⑮四四七九・其己呂。／ Kどもなし ③四五七・心神。③四七一・情神。⑪二五二五・

情利。⑫三〇五五・心神。⑬三二七五・情利。⑰三九七二・許己呂度。⑱四一七三・情度。／ Kともしと思ふ

⑫二八四二・心。

Kは解けて ⑰三九四〇・許己呂。／ Kを解く ⑪二六〇二・心。／ Kも解けず ②一四四・情。

K遂げじと ⑦一三八二・心。／ Kは遂げず ③四八一・心。／ 泣きしK ⑮四三五六・許己呂。

長きK ⑦一四一三・心 ⑧一五四八・意。／ Kは長く ⑥一〇四三・情。

Kなぐ ⑧一六二九・情。⑪二五七九・情。⑮三六二七・許己呂。⑱四一五四・情。⑱四一八五・情。／ Kな

ぐさに ⑮四一〇一・心。⑮四一〇四・許己呂。⑮四一一三・情。⑱四一八九・情。⑱四一九〇・情。／ Kどの

和ぐ ⑱四一七三・情。

慰むるK ⑤八八九・許己呂。⑤八九八・心。⑬三二八〇・心。⑰三九六九・許己呂。⑮四一一三・許己呂。

⑬四一二五・許己呂。／慰もるK ②一九六・情。②二〇七・情。④五〇九・情。⑪二五七一・心。⑪二五九六・心。⑫二九〇四・心。／嘆くらむK ⑬四一〇一・心。

K無き ⑩二二二六・心(秋)。⑫三二二二・心(雨)。⑬三三四二・意(山)。⑮三七八四・許己呂(鳥)。／K無く ①一七・情。①七一・情。⑫二九〇四・心。⑭三四六三・己許呂。／K無し ⑫二九〇七・神。⑫二九六〇・情。／Kし無くは ⑬四一一三・許己呂。⑬四一一五・許己呂。／Kは無しに ⑥九三五・情。⑩二二二二・心。⑪二三七六・心。⑪二五九六・心。／(あな)Kな(と) ⑩二三〇二・情。

何Kぞも ⑩二二九五・情。／何のKぞ ⑰三九一二・情。／Kからなつかしみ思ふ ⑦一三〇五・心。靡き藻のK ⑪二七八〇・情。／打ち靡くK ⑰三九九三・許己呂。／打ち靡きKは ④五〇五・情。⑪二七七九・心。⑬三二六六・情。⑬三二六七・情。／後のK ②九八・心。②九九・心。

乗りにしK ⑦一三九八・意。⑦一三九九・情。／Kに乗る ②一〇〇・情。④六九一・情。⑩一八九六・心。⑪二四二七・心。⑪二七四八・心。⑪二七四九・情。⑫三二七四・心。⑬三二七八・心。⑭三四六六・己許呂(の緒ろに)。⑭三五一七・許己呂。

K告れ ⑭三四二五・己許呂。／K延べむ ⑩一八八二・意。

春雨のK ⑩一九一六・情。／K引き ⑭三五三六・己許呂。⑱四二四八・心。／K開けて ⑧一六六一・心。／紐の緒のK ⑫二九七七・心。／太きK ②一九〇・心。／K二行く ⑭三五二六・己許呂。

K深めて ⑦一三八一・心。／Kも深く ⑪二四六九・心。

K振り起し ③四七八・心。⑰三九六二・情。⑳四三九八・情。

K隔てつ ⑱四〇七六・許己呂。／K隔てや ⑦一三一〇・心。／外K ⑪二四三四・心。

ますらをK ⑪二七五八・心。／ますらをのK ③四七八・心。⑩二二二二・心。⑰三九六二・情。⑱四〇九

五・許己呂。⑳四三三一・許己呂。⑳四三九八・情。／Kさへ奉れる ⑪二五七三・情。／Kを奉る ⑪

二六〇三・心。／待つらむK ⑱四一〇七・許己呂。／待たすらむK ⑰三九六二・情。⑱四一〇六・心。

- / K待て ⑬三三〇七・情。⑬三三〇九・心。 / 松が根の君がK ⑫三〇四七・心。
 惑へるK ④六七一・情。 / K惑ひぬ ④六三八・心。⑫二九五五・情。⑫二九六一・心。
 Kは守り敢へぬ ⑪二六五七・心。 / Kは：君がまにまに ⑬三二八五・心。
 御K ①三六・心。③四七八・心。⑤八一三・許さ呂。⑬四〇九四・心。 / K誰に見せむ ⑬四〇七〇・
 許己呂。 / Kは夢に見えきや ④七一六・情。 / 見しK ⑪二五二二・心。 / Kを見し明らかめし ③四七八・心。
 朝霧の乱るるK ⑬四〇〇八・許己呂。 / K乱れて ⑨一八〇五・心。
 結びしK ③三九七・情。 / 結びてしK ⑪二六〇二・心。 / Kと結びてし ⑬三七七七・心。 / 松が枝を結
 ぶK ⑥一〇四三・情。
 K咽せつつ ③四五三・情。 / Kのみ咽せつつ ④五四六・情。 / Kに咽せむ ④六四五・心。
 紫のK ④五六九・情。 / むらきものK ①五・心。④七二〇・情。⑩二〇九二・心。⑬三八一・心。
 K燃えつつ ⑨一八〇四・心。 / Kは燃えぬ ⑤八九七・心。⑬三九六一・情。 / Kには燃えて ⑫二九三二・
 情。 / Kのうちに燃えつつ ④七一八・心。 / Kには火さへ燃えつつ ⑬四〇一一・心
 持てるK ⑪二五三七・心。 / K持つ ⑫三〇五九・情。 / Kに持つ ⑮三七二三・許さ呂。 / Kをもちて
 ⑬三二八〇・心。⑳四三三一・許己呂。 / Kは持たじ(ず) ③四三七・心。④六一九・意。⑩二三〇八・情。
 ⑪二五二八・心。⑭三三六五・己許呂。 / 百重なすK ④四九六・心。⑫二九〇二・情。
 八十のK ⑬三二七六・心。 / K安き空 ⑨一七九二・情。 / Kのうちは止む ⑪二七八五・心。
 K焼く ⑦一三三六・情。⑬三二七一・情。 / K休めむ ⑫二九〇八・心。 / 山人のK ⑳四二九四・情。
 K遣る ⑪二四五二・意。⑫二八四五・意。⑬三九九一・許己呂。⑭四一八七・情。 / Kを遣る ③三四六・
 情。 / Kをぞ使いに遣りし ⑫二八七四・情。 / Kのみ妹がり遣りて ⑭三三三八・己許呂。
 Kし行けば ④五五三・情。⑬三九八一・許己呂。 / Kも行かず ③四六六・情。 / Kには緩ふ ⑬四〇
 一五・情。 / 汝がKゆめ ⑦一三五六・情。⑪二五一・心。⑬三三〇五・心。 / K縦す ④六一九・

情。④六七三・心。

淀まむK ⑫三〇一九・心。／恋の淀めるK ⑪二七二一・情。／ Kよし ⑩一八八九・心。

Kは寄る ④五〇五・情。④五四七・心。⑩二二四二・心。⑪二四八二・心。⑪二七二四・心。⑪二七八〇・情。⑫二九八五別歌・心。⑫二九八六・心。⑮三七五七・許己呂。／（打ち靡き）Kは寄る ⑬三二六六・情。

⑬三二六七・情。／K寄せむ ③四八〇・心。

海神わたがみのK ⑦一三〇三・心。／ 別くわかこと難きK ⑩二一七一・情。

K忘れめや ⑪二四九六・心。／Kさへ：忘れる ④七七〇・情。／Kには忘れぬ ④六五三・情。／Kには忘るる日なく ④六四七・心。／Kは忘らゆ ⑫四四八二・許己呂。／Kは忘れせぬ ⑫四三五四・己呂。／

K（は・し）忘れかねつも ③三九七・情。⑦一三九九・情。⑫三〇四七・心。⑬三八五七・情。／Kを忘らえぬかも ⑫四三五六・許己呂。／Kを忘れて思へや ④五〇二・心。／Kも常忘らえず ⑦一三九八・意。⑬三二九〇・心。

雄K ⑫二八七五・心。／K惜おぼしけくもなし ⑬三二五一・心。

*

『萬葉集』で、「こころ」が如何なる形容詞を伴い、どのような叙述がなされるか、を拾い出して、現代の通常の記事に統一して列挙してみた。

「こころ」とは、「有」ったり「無」かったり、「持」つか否か、「知」ったり「忘」れたり、「思」い、「恋」うるもの、「浅」かったり「深」かったり、「長」いもの「太」いもの「遠」いものがあり、「痛」み「悲」しみ「苦」しむもの、「（消え）失」せたり「碎」けたり「尽」したり、「和」いんだり「待」ったり「遣」るもの、「燃」え「焼」け、「結」び「解」け「寄」り、「靡」くもの、「同」か「異」か、「足」るか否かが問題になるもの、「移」

ろい「惑」い「乱」れ「淀」み「咽」せるもの、「紫」が染みて思われ、「はねず色」のように移ろいやすく、「紅に深く染」みるもの、等々、『萬葉集』の中で姿が様々に判る。上記の抽出が、それらの詳細及びその他の今後の考察の資料としての意味が幾らかでもあれば、ここではよしとしたい。「こころ」の表記について、何らかの規則性や法則のようなものはまずない、と言いつつてよからう。例えば、「摧く」と結びつく時には「心」、「痛き」と繋がる場合には「情」とでもなっていればともかく、そのようなことはないのである。「心摧けて」⑨一七九二、「摧かむ情」⑩二三〇八、「心の痛き」⑬三三二五〇、「意の痛き」⑬三三二九、といった具合なのだから。現代の感覚では、新鮮に響く「こころ」も少なくないが、集中十二回出てくる「こころに乗る」という表現は特に注目に値いしよう。

- 一、東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は情に乗りけるかも ②一〇〇
- 二、もしきの大宮人はさはにあれど情に乗りて思ほゆる妹 ④六九一
- 三、楽浪の志賀津の浦の船乗りによりにし意常忘らえず ⑦一三九八
- 四、百伝ふ八十の島廻を漕ぐ船に乗りにし情忘れかねつも ⑦一三九九
- 五、春さればしだり柳のとををにも妹は心に乗りけるかも ⑩一八九六
- 六、宇治川の瀬々のしき波しくしくに妹は心に乗りけるかも ⑪二四二七
- 七、大船に葦荷刈り積みしみみにも妹は心に乗りけるかも ⑪二七四八
- 八、駅路に引き舟渡し直乗りには妹は情に乗りけるかも ⑪二七四九
- 九、漁りする海人の楫音ゆくらかに妹は心に乗りけるかも ⑫三二七四
- 十、赤駒を 厩に立て 黒駒を 厩に立てて 身を飼ひ 吾が行くがごと 思ひ妻 心に乗りて 高山の 峰のたをりに 射目立てて 鹿猪待つがごと 床敷きて 吾が待つ君を 犬な吠えそね ⑬三二七八
- 十一、ま愛しみ寝れば言に出さ寝なへば已許呂の緒ろに乗りて愛しも ⑭三四六六

十二、白雲の絶えにし妹をあせせろと許己呂に乗りてここば愛しけ ⑭三五一七

「こころ」の表記がこの場合も五通りもある。この十二例、全て、心に乘るのは女性であり、心に乘られるのは男性である。第十例以外は全て男の作品である。唯一女性の作品であるこの長歌は、殊の他の秀作であろう。栗毛馬を、黒馬を既に大切に飼育してそれに私が乗ってゆくように、可愛い妻が私の心に乗って心を占めてしまつてね、などと言つてくださるあなたを、私は高い山の峰の窪に獣を狙い射る場所を作つて待ち伏せるように寝床を整えて待つて居るので、私が待ちに待つて居るその夫を、犬よ、吠えたりしないでね、というのである。夫婦双方の愛情が、具体的な譬喩によるイメージで活写されているばかりか、当時の社会状況もよく判る作品である。犬は実際にも山野に多く生息したのであるが、第十一例の作中の「言に出」なども示すように、二人の愛情をあれこれ取り沙汰する口さがない近所の人々の寓喩でもある。

「思ひ妻」などという新鮮な響きの話とも相俟つてこの作品は、男性の「心に乘る」萬葉時代の女性たちへの思いを掻き立ててやまない。「萬葉集」に登場する「妹」、特に「つま」たちを次に垣間見てみたい。

(二)

『萬葉集』で、「つま」「め」と訓まれる男女の配偶者を指す表記は、次の十一通りである。出てくる順に、A、Kの記号を付して表に示してみよう。「つま」の場合も、表記の違いに何か意味があるのか否か気にかかるが、結論を言つてしまえば、「こころ」の場合同様、殆ど法則性・規則のようなものは見当たらない、と言う方が安全であろう。後に触れるように、若干、恣意的に觀察の結果を、もっともらしく言うことは出来ようが、余り意味はなさそうである。

巻	歌番号	つま	表	現
一	一三	A	婦を争ふ	
	二二	A	人婦	
	五九	B	妻吹く風	
	八四	B	妻恋ひ	
二	後九〇	A	雄朝婦	
	前三一	B	妻に別れて	
	一三五	A	婦隨る	
	一三八	A	吾が婦の兒	
	前四〇	B	人麻呂が妻	
	一五三	A*	若草の婦	
	一九四	A*	婦の命の	
	一九六	A*	片恋ひ婦	
	二一〇	A	婦屋の内に	
	二二三	A	婦屋の内に	
	二二七	A*	若草のその婦	
	二二〇	B	妻知らば	
	ク	B	愛しき妻ら	
二	二二二	B	妻もあらば	
	二五七	B	鴨妻喚ばひ	
	二六〇	B	鴨妻喚ばひ	
	二六八	A*	嶋待ちかねて	
	前二八一	B	黒人が妻の	
	四二六	A*	誰が婦か	
	四三一	B	妻問ひ	
	四四三	B	妻に子等に	
	前四八一	B	死にし妻を	
	四八一	B	さ寝し妻屋	
	前五〇〇	B	妻の作る歌	
	前五〇四	B	人麻呂が妻	
	前五一一	B	大夫が妻	
	五一七	B	人妻	
	五三四	A	遠婦	
	五四三	C	愛し夫	
	五四六	B	自妻	
三	五八五	B	妻恋ひ	
	前六一	B	東人が妻	
	六三四	B	旅にも妻と	
	六三五	A	旅には婦は	
	六三七	A	王が妻	
	前六四三	B	婦問ひに	
	六六三	B	愛しき妻	
	七九五	D	都摩夜	
	前八〇〇	B	妻子を顧みず	
	八〇〇	B	妻子見れば	
	八七一	E*	都麻恋ひに	
	八九二	B	妻子どもは	
	ク	B	妻子どもは	
	九二〇	E	かはづ都麻	
	九五二	A*	嶋待つに	
	後一〇二七	B	妻苑臣に	
	一〇四七	B	妻呼び響む	
四	一〇五〇	B	妻呼び響め	
	一〇五三	B	妻呼ぶ秋は	
	一〇六二	B	千鳥妻呼ぶ	
	一〇六四	B	白鶴の妻呼ぶ	
	一一二五	B	千鳥妻喚び	
	一一二九	A	婦や置れる	
	一一六二	B	妻唱び立てて	
	一一六五	B	己妻喚ばふ	
	一一九八	B	自妻喚ぶも	
	一二五七	B	妻といふべし	
	一二六二	A	齋ひ婦	
	一二七八	●	房の下に	
	一二八五	F	若草の嬢	
	一二九四	B	遠妻	
	一四四六	B	妻恋ひに	
	一四五三	B	鶴が妻喚ぶ	
	後一四七二	B	大伴卿が妻	

豆末	嬢	婦
K	F	A
1	15	34
計240	都末	妻
	G	B
4	140	
	媼	夫
H	C	
1	4	
	豆麻	都摩
I	D	
8	1	
	追麻	都麻
J	E	
1	31	

(一云の(A)は総計の中に含まないでおく)

『萬葉集』では、男女を問わず配偶者を共に「つま」と呼ぶのは公平で結構だが、男の方を表わすのに「夫」は四回使われるだけで、他の十六回は「婦」「妻」「嬬」などを悠然と使用する。前表の「つま」欄の*印はそれら男の方、「夫」を指すものである。

⑥印を付した⑥九五二の「婦」は、男女いずれの配偶者をも指すもの。この作品と、③二六八との「嶋」は、原文は「嶋」であるが「婦」の誤字説に依っていることを示す。誤字説といえは⑬三二九九の「妻」は、「益」の誤字ではないか、との説もあり、この作品の結句は難解とされているのは周知の通り。

歌番号の上の「●」印は、鹿や雁、鴨など動物の「つま」であることを示すが、③二六八、⑧一五四一、⑧一五六一、⑧一五六二、⑧一六二九、⑩二一五三、が「婦」である以外は、全て「妻」である。

左注や詞書など、詩歌以外の文章中に表われる「つま」「め」は、允恭天皇の諡の中の「雄朝婦」(②後九〇)以外は、全て「妻」である。

⑳四三四三は、「メ」の訛りの「ミ」がそのまま表わされて、「妻」ではなく「美」が使われている。

「つま屋」(母屋の横に建てられた離れの建物で、新婚夫婦用の家屋とも言われる)は集中六回現われるが、②二二〇(A)、②二二三(A)、③四八一(B)、⑤七九五(D)、⑨四一五四(E)の他もう一回の、⑦一二七八は、「房」一字を「つま屋」として使っていて、「つま」に相当する文字を用いていない。

配偶者を若草の瑞々しさに譬える「つま」の枕詞「若草の」が妻(夫)と結び付いて使われるのは十一例あるが、「若」には「稚」「穉」「藹」の変化が見られる(表音式表記は今では問題にしない)。

若草の夫——②二五三(A)、②二二七(A)、⑨二七四二(C)。

若草の妻——⑦二八五(F)、⑩二〇八九(B)「稚」、⑪二三六一(B)「穉」、⑬三三三六(B)「藹」、⑬三三三九(B)「稚」、⑳四三三一(E)、⑳四三九八(E)、⑳四四〇八(E)。

種々の「つま」が現われて興味深いのでそれを一瞥してみたい。女を「妻」、男を「夫」に統一して、原文の文字は先刻来の表で用いた記号で示す。「人妻」と「己妻」が多く現われるのは当然であろう。

人妻（他人の配偶者・既婚者）——①二一（A）。④五一七、⑨一七五九、⑩一九九九、⑩二二九七、⑪二三六五、⑫二八六六、⑫二九〇九、⑫三〇九三、⑫三一一五（以上B）。⑭三四七二、⑭三五三九、⑭三五四一（以上I）。⑭三五五七（E）。①二一は天皇の「つま」で「孀」が用いられているが、その他は表意式は全て「妻」であり、「ひと」も、⑨一七五九の「他」以外は、全て「人」である（卷十四の「ひと」は表音式）。

人夫——⑬三三二四（G）。これ一回のみ。「人妻」も「人夫」も卷十五以降の卷には現われない。

己妻——④五四六「自」、⑦一一九八「自」、⑨一七三八、⑭三五七一（I）、⑯三八〇八。卷十四の例以外は全て（B）。

己が妻——⑩二〇〇五（F）「自」。⑪二六五一、⑫三〇九一、⑦一一六五、以上三例全て（B）。尚、この最後の例、⑦一一六五の「己妻喚」（おのがつまよぶ）は、（おのづまよばふ「ぶも」）の訓もあるので、そう訓めば「おのづま」の例となる。

己夫——⑩二〇〇四（F）、⑬三三二四（C）。尚、「己」には「自」が使っている場合を「」で示した。

我が妻——②一三八（A）「吾」、⑨一七五九（B）「吾」、⑪二四二八（F）、⑫三〇一四（B）「吾」、⑬三三二九五（F）「吾」、⑭四三三二（E）「和我」、⑯四三三七（E）「和我」。「我が妻」の訛りで⑳四三三三「和加美」があることは既に触れた。

以下、五十音順に種々の「つま」を取り上げてみよう。

朝妻（早朝帰ってゆく男を見送る妻）——⑩一八一七、一八一八（共にB）。地名「朝妻（山）」との掛け言葉で使われている。

斎ひ妻（夫のために潔斎してその無事を祈っている妻）——⑦一二六二（A）。

愛し妻——⑬三二七六（B）。（波雲の）愛し妻。形の良い波雲のように見飽きない慕わしい妻。

愛し夫——④五四三（C）、⑬三三三〇三（B）。

奥妻（心の奥深くに思う妻）——⑰三九七八（I）。

思ひ妻（愛する妻）——⑪二七六一（B）「念」、⑬三二七八（B）。「おもひ」には「念」が断然多い。

片恋ひ夫——②一九六（A）。一人残されて一方的に片思いしている夫君忍壁皇子を指している。

心夫（心の中で密かに愛し思っている人）——⑧一六一一（G）。女性、笠縫女王の歌なので、この相手は男。

言寄せ妻（いい仲だとその関係を評判立てられている妻）——⑪二五六二（B）。

恋ひ妻——⑪二三七一（F）、⑪二四八〇（F）。これに関連した表現、「妻恋ひ」①八四（B）、④五八五（B）、

⑧一四四六（B）、⑧二六〇〇（B）、⑧一六〇二（B）、⑨一六八六（A）、⑩一九三七（E）、⑩一九三八（B）、

⑩二〇八九（B）、⑩二二五〇（B）、「夫恋ひ」⑤八七一（E）がある。

隠り妻（通ってくる夫が自分との関係を未だ世間に公表してくれていない妻、人目を忍んで逢う仲の妻）——

⑩二二八五（A）、⑪二五六六（B）、⑪二六五六（A）、⑪二七〇八（B）「内り」、⑪二八〇三（B）、⑬三二六

六（E）、⑬三三二二（F）、⑬四一四八（I）「己母利」。類似のものに、「隠りたる妻」⑪二五〇九（F）、「隠

せる妻」〔親の許しを得ずに担ぎ出し、人目につかない所に隠し置いてある妻〕⑪二三五三（B）、⑪二三五四（B）

があり、「妻や隠れる」⑦一一二九（A）「匿」、「妻隠る」②一三五（A）、⑩二二七八（B）、の表現が見られる。

遠妻（遠くに離れて住んでいる妻）——④五三四（A）、⑦二二九四（B）、⑧一五二二（A）、⑨一七四六（B）、

⑩二〇二一（H）……この原文は底本は「遥嬖」であるが、「嬖」は老婆のさまを意味する字であり、元暦校本な

どで用いられている「嬖」は醜女を指す字なので、共に誤字の可能性が大きいから『玉台新詠』に美貌を表す字

として使われている「嬖」が、原文の文字だったと見なそうとする説がある（小）。感銘深い卓説だと思いが、

しかし果してそこまで漢字の原義を意識した文字使いを表記者はしているのであろうか。

乏し妻（逢うことが極めて稀な妻）——⑩二〇〇二（F）。

嘆かす妻（逢い難いことを嘆いている妻）——⑩二〇〇六（F）。ここでは織女星を指している。

愛し妻（可愛いとしい妻）——⑧一五二二（A）、の「遠嬖」の別の句として用いられるもの。これに関連

して「愛しき妻」②二二〇（B）、④六六三（B）、②〇四三三（E）、がある。

花妻（花のように美しい妻）——⑧一五四一（A）、⑩四一二三（K）。
花つ妻（花のように美しいが抱いて寝られない妻？）——⑭三三七〇（I）。

「我が岡にさ雄鹿來鳴く初萩の花妻問ひに來鳴くさ雄鹿」⑧一五四一、の「花妻」は、萩の花を鹿の妻と見做して初萩の花を妻問おうとして、と表現したもの。

一夜夫（ただ一夜を共にした、一夜契りを結んだのみの相手の男）——⑯三八七三（B）。男を表わすのに原文は平然と「妻」を用いている。

目妻（眼で見て愛するだけの妻）——⑭三五〇二（I）。

寄そり妻（世間の人から噂を立てられている妻。密かに心を寄せているのだと噂されている妻）——⑭三五一二（E）。この作品、「一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり妻はも」は、「一つ山の（一緒に寝ている）仲だと言われているながら私が寝ようよ（吾を寝ろ）と言うとその言葉に青嶺ろにためらって漂っている雲のような噂だけの妻よ、今どうしているのだろうか」というもので、掛け言葉と譬喩とを巧みに交錯使用して、集中唯一度しか現われない「寄そり妻」などという造語？と共に、秀吟であろう。

掛け言葉といえ、前述した「朝妻（山）」の他に、地名「印南つま」とのそれがある。⑮三五九六（E）。他に次の例がある。

夫松（待つ）——⑥九五二（A）、⑨二七九五（A）。前者の原文「嶋」は「嬌」の誤りだとする佐竹昭広説に依る（小）。松—待つ、の掛け言葉には「吾が松」⑩一九二二、「君松の樹」⑥一〇四一、などがある。

妻梨（無し）——⑩二一八八、二一八九（共にB）。

誰の配偶者か、と問ふ「誰が夫」③四二二六（A）、「誰が妻」⑨一六七二（B）、⑳四三九七（E）がある。「つま」はどうするか、「恋ふ」（前述）以外を一瞥してみよう。

妻離く——⑬三三四六（B）。妻放かり——⑬三三四七（B）。

夫は知れる——⑩一九九八（A）。この「つま」は織女星が彦星を指している。

妻整ふ（妻を呼び集め並べる）——⑩二二四二（B）。雄鹿が鳴くのである。

妻問ひ——③四三一（B）、④六三七（A）、⑧二五四一（花妻、A）、⑧二六二九（A）、⑨一八〇一（B）、

⑨一八〇二（B）、⑩二二五三（A）。

妻問ふ——⑨一七九〇（B）、⑩二〇一一（F）、⑩二〇九〇（B）、⑩二〇九八（B）、⑩二一三一（B）、⑩

三七九一（B）。

妻まかむ（妻と寝よう）——⑩二二六五（B）。

妻を求む——⑩一八二六（B）。

妻寄しこせね（妻を授けたまえ）——⑨一六七九（B）。夫寄しこせね——⑭三四五四（E）。前者は「妻の社」

なる神社に、後者は「麻手小衾」（麻の布団）に、寄びかけ、語りかけている。妻と夫が一例ずつあるのが面白い。尚、⑨一六七九、「紀伊の国に止まず通はむ妻の社妻寄しこせね妻と言ひながら」は（一に云ふ「妻賜はにも妻と言ひながら」の場合も）短歌一首中に三回「妻」が使われる集中唯一の例である。

妻呼ぶ——⑥一〇五三、一〇六二、一〇六四（以上、イ・B）。⑦一二二五（ロ・B）、⑧一四五三（ロ・B）。

⑧一五六一、一五六二（以上、イ・A）。⑩二〇七五、二〇八六（以上、ロ・A）。⑩二二四一、二二四八、二二五一、二二六五（以上、イ・B）。⑩二二二〇（ロ・B）、⑰四〇〇六（E）、⑳四三二九（E）。この「妻呼ぶ」は、*印の二作品（彦星が妻を呼ぶ）以外は全て、鹿や鴨、かはすなどの動物が主人公である。尚、「よぶ」には原文では「呼」（イ）と「喚」（ロ）の二字があることを記号で示しておいた。表音式は本稿の常で今は問わな

い。

妻呼び交はす——⑰三九九三（E）、⑰四〇一八（E）。共に動物が主語。

妻唱び立てて——⑦一一六二（B）。呼ぶのは洲鳥。

妻呼びとよむ——⑥一〇四七（イ・B）。妻呼びとよめ——⑥一〇五〇（イ・B）。呼ぶのは共に雄鹿。

妻別れ——⑳四三三三、四三三九（共にE）。

*

「つま」を表わす文字は、通常は「妻」(B)を用いており、動物の「つま」は、極く少数の例外(それも、作者が身分の高い人物が殆ど)を除くと全て「妻」であること、概して、身分の高い作者の作品や、身分の高い人物を指す場合、七夕伝説中の織女星、彦星を指す時は、「婦」(A)、「嬬」(F)を用いる傾向にあること、などが観察されよう。既に一言したが、男の方を表わす「夫」(C)は集中で四回使われるものの、「夫」を表わすのに、文字の一部に「女」の付くA・B・F・H、を悠然と使つて、男女の区別にはまず意を用いていないことが、判る。

「人妻(夫)」や「我が妻」「己が妻」は勿論、「己妻(夫)」や「恋ひ妻」辺りまでなら現代でもそれ程特別には響かないが、「隠り妻」や「遠妻」は新鮮な語として迫る佳句である。まして、集中、殆ど一例ずつしか現われない「朝妻」「斎妻」「愛し妻(夫)」「奥妻」「思ひ妻」「片恋ひ夫」「心夫」「言寄せ妻」「乏し妻」「愛し妻」「花妻」「花つ妻」「一夜夫」「目妻」「寄そり妻」の目新しさには、現代の我々は思わず心惹かれて、これらの「つま」たちに「心に乘」られてしまふそうだ。

鮮烈な語彙と言えば、「妻迎へ船」⑧一五二七(A)には瞠目させられよう。『萬葉集』の七夕の歌も「日本の妻問ひの習慣に合わせて、大半が牽牛が織女の方に逢いにゆく」設定だが「これはその折衷形式」(小)で、彦星が織女を自分の方へ呼び寄せするために船を仕立てて迎えに出すその船の謂である。こういう船には織女ならずとも妻はいそいそと乗り込むだろうし、そういう夫に「心に乘」られてしまふに違いない。

斎藤茂吉の第一歌集『赤光』の、次の諸作

をさな妻をとめてなりて幾百日こよひも最早眠りゐるらむ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり

をさな妻こころに持ちてあり経れば赤き蜻蛉の飛ぶもかなしも

公園に支那のをとめを見るゆゑに幼な妻もつこの身愛しけれ

をさな妻をさなきままにその目より涙ながれて行きにけるかも

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細りたるなれ

をさな妻こころに守り更けしづむ燈火の虫を殺してゐたり

の「をさな妻」「幼な妻」は、純然たる茂吉の〈造語〉か否かはともかく、これら秀歌、特に二首目の秀吟によって脚光を溢びて登場した語彙と言つてよく、この語を産みだし使用した語感は、『萬葉集』の前記の新鮮な「つま」たちに触発されたのではないかと本稿の筆者は密かに考えている。年令の遥かに離れた年下の、初々しく瑞々しい乙女乙女した感じの若い妻を指して、この「幼な妻」は間然する所のない美事な語で、今も引き続きいる。本稿はもしかすると、この語彙の源泉を探しての、『萬葉集』の〈こころ〉と〈つま〉たちの観察だったのかも知れない。そう言えば、茂吉も、その短歌作品中に、頻りに「こころ」なる語を種々に用いている。そう思つて彼の最初の歌集『赤光』全八三四首中、「こころ」なる語が使われている作品を調べたらその数六五首、『赤光』全作中に占めるその割合は、七・八%弱であり、先刻述べたように『萬葉集』で「こころ」が使用される作品の全巻での割合七・六%強と、何と！殆ど同じであつた。

注

1. 次の略記である。並びに本稿での主たる参考文献。

(藍) 藍紙本。(壬) 伝壬生隆祐筆本。(類) 類聚古集。(紀) 紀州本。(元) 元暦校本。(古義) 萬葉集古義。

萬葉集評釋 窪田空穂 十二冊 東京堂・昭二八〜二七/補訂版 七冊 角川書店(窪田空穂全集)・昭四

- 一〇二
- (全註) 萬葉集全註釋 武田祐吉 十六冊 改造社・昭二三〇六／増訂版 十四冊 角川書店・昭三一〇二
 (私注) 萬葉集私注 土屋文明 二十冊 筑摩書房・昭二四〇三／新訂版 十冊 昭五一〇二
 (岩) 萬葉集(日本古典文学大系) 高木市之助・五味智英・大野晋 四冊 岩波書店・昭三二〇七
 (注釈) 萬葉集注釋 澤瀉久孝 二十冊 中央公論社・昭三二〇四三
 (小) 萬葉集(新日本古典文学全集) 小島憲之・木下正俊・東野治之 四冊 小学館・一九九四一九六
 (新) 萬葉集(日本古典集成) 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 五冊 新潮社・昭五一〇九
 萬葉集(訳日本の古典) 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 六冊 小学館・昭五七〇六二
- (新校) 新校萬葉集 澤瀉久孝・佐伯梅友 創元社・昭四七
 (塙) 萬葉集・本文篇 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 塙書房・昭三八
 (桜) 萬葉集 鶴久・森山隆編 桜楓社・昭五九
 (角) 萬葉集 上・下 伊藤博校注 角川文庫・昭六〇
2. 幸田露伴「王義之」
3. 前半は男性の、後半は女性の、作品が合体していると見るのが現行の大方の解釈のようである。しかし筆者はそうは看做さない。
4. 『萬葉集』には、この、人目、人の口を気にする男女の愛情を素材にした作品が甚だ多い。そういう狭い社会だったのであり、その状態と人々の心情は、現代でも日本は基本的に変っていないと言えよう。他人の「愛」の記事で溢れる週刊誌の類の隆盛を想うだけでも。
5. 次の文章、後三八一〇、前三八一、後三八一三、後三八一五、に出てくる二回の「夫」と四回の「夫君」は、それぞれ「せ」、「せのきみ」と訓む(角)ことにして、本表では「夫」の数には入れていない。
6. 『萬葉集』に早くから親炙した茂吉は、『赤光』の中でも、「ねもころころに」「たくひれの」「豊旗雲」「豊酒」「とことは」始め万葉語や万葉集の語法を頻用しているが、『赤光』に収録した一首「遠ひとに吾恋ひ居れば久かたの天のたな雲に鶴飛びにけり」の原歌(新聞「日本」明治四〇年九月九日)は「遠妻に吾恋ひ居れば久方の天のたな雲に鶴二つ飛ぶ」であり、「遠妻」が使われていた。